

清流

題 字 : 芳野 充

令和 8 年 1 月 30 日

第 109 号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

笑顔が思いやりの一丁目一番地

時おり、「この人はすごく感じの良い人だな」と思う方に会えることがあります。そんなときは決まって、ムリのないとてもステキな笑みを浮かべている人です。

人間関係というものはどんな表情を相手に見せるかによって、おおきく左右され、その判断は、ほぼ一瞬で決まるとわたしは思っています。

笑顔で接するの、無表情、あるいは不愛想に接するの、それによってその後の流れは変わります。そして良い流れになるのか良くない流れになるかを決めるのは相手です。さんねんながら自分ではありません。

わたしは笑顔であいさつすることを大切にしています。それは家庭においても職場においてもです。とは言えまだまだ満足に笑顔であいさつできるレベルではありません。ですが、年々その重要性を肌で感じます。

まったく笑顔であいさつができなかったころをふり返ると、相手のことよりも自分のことを優先していました。体調がすぐれない、恥ずかしい、かっこう悪い、イヤなことツライことがあった、いそがしい、そんな理由ばかりでした。

ですが、くらい表情や不愛想なあいさつは、相手に不安や不快さを与えることになり、知らず知らずのうちに良くない人間関係を築いてしまします。反対に、笑顔であいさつすることで相手に安心や喜びが伝わり、心のかよった良い人間関係が築かれていきます。さらに言えば、自分よりも相手を優先しようという思いがなければ、笑顔であいさつすることはおぼろしい。そのことに気づいたとき、わたしは「思いやりが足りていないのだ」とつよく実感しました。

すこしわたし自身の話をします。仕事中、何かのきっかけでイライラすることがありました。その雰囲気（きふき）を隠すこともなく、そのまま過ごしていました。そんななか、あるお客さまのところにいくことになりました。わたしは「この不機嫌な顔では仕事に差しつかえる」と思い、つとめて笑顔で対面しました。しかし会社にもどるとふたたび不機嫌な顔にもどってしまったのです。

いま思えば、「お金をいただくお客さまだからいい顔をしなければ」という損得勘定（えんとくかんてい）がはたらいていました。一方で社内のスタッフにはわたしのわがままや甘えがでていたのだと思います。

いつも笑顔であいさつすることは、けっしてかんたんなことではありません。だからこそ毎日笑顔を意識する。その笑顔こそが「思いやりの人に安心やよろこびを渡すことができる。わたしは、笑顔こそが「思いやりの一丁目一番地」だと思っています。今日も明日もカガミの前でにっこり笑顔の練習にはげみます。

加来 寛

